

平成30年度環境測定分析統一精度管理調査結果（本編）（平成31年2月）正誤表

平成31年3月に送付させていただきました報告書（本編）に誤りがありましたので、以下の通り訂正し、お詫び申し上げます。

箇所		誤						正								
p.9 表1-4(2)	表 1-4(2) 試料別の調査結果の回収状況（参加機関と回答機関数）						表 1-4(2) 試料別の調査結果の回収状況（参加機関と回答機関数）									
	区分		共通試料1 模擬排水試料 (金属等)		共通試料2 模擬大気試料 (有害大気汚染物質)		共通試料3 底質試料 (PCB)		区分		共通試料1 模擬排水試料 (金属等)		共通試料2 模擬大気試料 (有害大気汚染物質)		共通試料3 底質試料 (PCB)	
			参加 機関数	回答 機関数	参加 機関数	回答 機関数	参加 機関数	回答 機関数			参加 機関数	回答 機関数	参加 機関数	回答 機関数	参加 機関数	回答 機関数
公的機関	都道府県	64	64 (4)	33	31 (4)	12	9 (1)	公的機関	都道府県	70	70 (4)	33	33 (4)	12	9 (1)	
	市	59	59	13	12	7	6		市	53	53	13	13	7	6	
民間機関		344	332 (9)	40	29	155	121 (3)	民間機関		343	338 (9)	39	32	154	119 (3)	
合計		467	455	86	72	174	136	合計		466	461	85	78	173	134	
p.132 表2-2-3-1(5)	表 2-2-3-1(5) 過去の結果（外れ値等棄却後）との比較						表 2-2-3-1(5) 過去の結果（外れ値等棄却後）との比較									
	実施年度 (平成)	分析方法 前処理		測定	回答 数	平均値 (μ g/kg)	室間精 度 CV%	実施年度 (平成)	分析方法 前処理		測定	回答 数	平均値 (μ g/kg)	室間精 度 CV%		
		抽出	クリーンアップ						抽出	クリーンアップ						
59 (昭和)	アルカリ 分解へ キサン抽出	シリカゲルクロマト		パックドカラム- GC/ECD (係数法)	43	101	52.2	59 (昭和)	アルカリ 分解へ キサン抽出	シリカゲルクロマト		パックドカラム- GC/ECD (係数法)	43	101	52.2	
		アセトニトリル・ヘ キサン分配-シリカゲ ルクロマト			4	75.6	46.5			アセトニトリル・ヘ キサン分配-シリカゲ ルクロマト			4	75.6	46.5	
		硫酸処理-シリカゲ ルクロマト			10	97.3	43.4			硫酸処理-シリカゲ ルクロマト			10	97.3	43.4	
		全体			57	98.6	50.5			全体			57	98.6	50.5	
		シリカゲルクロマト			パックドカラム- GC/ECD (パターン 合わせ法)	1	98.7			-	シリカゲルクロマト		パックドカラム- GC/ECD (パターン 合わせ法)	1	98.7	-
30	多くはアル カリ分 解へキ サン抽出	多くは「硫酸処理-シ リカゲルクロマト」ま たは「シリカゲル クロマト」		バックドカラム- GC/ECD (係数法)	76	88.1	44.8	30	多くはアル カリ分 解へキ サン抽出	多くは「硫酸処理-シ リカゲルクロマト」ま たは「シリカゲル クロマト」		バックドカラム- GC/ECD (係数法)	76	88.1	44.8	
				キャピラリーカ ラム-GC/ECD (係 数法)	39	76.9	42.5					キャピラリーカ ラム-GC/ECD (係 数法)	39	76.9	42.5	
				キャピラリーカ ラム-GC/QMS	2	94.5	-					キャピラリーカ ラム-GC/QMS	2	94.5	-	
	多くは ソックス レー抽出	多くは「硫酸処理-多 層シリカゲルクロマ ト」または「多層シリ カゲルクロマト」		キャピラリーカ ラム-GC/HRMS	5	85.8	9.15		多くは ソックス レー抽出	多くは「硫酸処理-多 層シリカゲルクロマ ト」または「多層シリ カゲルクロマト」		キャピラリーカ ラム-GC/HRMS	5	85.8	9.15	
	全体						43.2		全体						122	84.5

<p>p. 133 「(d) 総括評 価・今後 の課題」 の11行 目</p>	<p>測定操作別の結果としては、＜パックドカラム-GC/ECD＞での室間精度CV (44.8%) は、昭和59年～平成24年の室間精度CV (43.7～50.5%) と同様の値であり、過去の結果を通じて室間精度CVに大きな変化はなかった。＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞での室間精度CV (42.5%) は＜パックドカラム-GC/ECD＞と同等の室間精度CVであった。＜キャピラリーカラム-GC/HRMS＞での室間精度CV (9.15%) は良好な結果であった。測定操作別の平均値に有意差はなかった。＜パックドカラム-GC/ECD＞、＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞においては、室間における回収率のばらつきが、室間精度CVの大きさとなって現れたと考えられる。</p> <p>要因別の解析では、上記の測定操作（＜パックドカラム-GC/ECD＞、＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞、＜キャピラリーカラム-GC/HRMS＞）の他に、分析に要した日数、抽出操作、クリーンアップ操作、スパイク（サロゲート及びシリンジスパイク）添加の有無、標準物質の種類（KC-300～KC-600の混合物、1～10塩素化物を各ひとつ以上含む混合物）、定量方法（絶対検量線法、内標準法）により、室間精度CVに違いがみられた。しかし、これらの違いは、上記に示した測定操作を反映した結果と考えられる。</p>	<p>太字、下線、網掛けでお示しした部分を追記いたしました。</p> <p>測定操作別の結果としては、＜パックドカラム-GC/ECD＞での室間精度CV (44.8%) は、昭和59年～平成24年の室間精度CV (43.7～50.5%) と同様の値であり、過去の結果を通じて室間精度CVに大きな変化はなかった。＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞での室間精度CV (42.5%) は＜パックドカラム-GC/ECD＞と同等の室間精度CVであった。＜キャピラリーカラム-GC/HRMS＞での室間精度CV (9.15%) は良好な結果であった。測定操作別の平均値に有意差はなかった。＜パックドカラム-GC/ECD＞、＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞においては、室間における回収率のばらつきが、室間精度CVの大きさとなって現れたと考えられる。GC/ECD法は底質暫定除去基準10ppm(10000 μg/kg)程度の高濃度試料を対象として規定された分析法であり、今回の室間精度CVの大きさは、同方法による環境中低濃度試料を分析対象とした場合の難しさを示している。</p> <p>同族体毎分析値の室間精度 CV は、＜パックドカラム-GC/ECD＞と＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞でそれぞれ 46.8～58.0%、21.7～101%であり、＜キャピラリーカラム-GC/HRMS＞で 6.16～34.7%であった。底質調査方法におけるGC/ECD では同族体毎（パックドカラム）または異性体毎（キャピラリーカラム）に溶出順位を割り当てているが、GC/QMS、GC/HRMSと比較して、①ピーク分離能が低い（パックドカラム）②塩素数が異なる異性体ピークの重なりは分離できない③測定対象が二塩化～九塩化ビフェニルに限定される、などの理由で同族体毎分析値の精度が低いと考えられる。</p> <p>要因別の解析では、上記の測定操作（＜パックドカラム-GC/ECD＞、＜キャピラリーカラム-GC/ECD＞、＜キャピラリーカラム-GC/HRMS＞）の他に、分析に要した日数、抽出操作、クリーンアップ操作、スパイク（サロゲート及びシリンジスパイク）添加の有無、標準物質の種類（KC-300～KC-600の混合物、1～10塩素化物を各ひとつ以上含む混合物）、定量方法（絶対検量線法、内標準法）により、室間精度CVに違いがみられた。しかし、これらの違いは、上記に示した測定操作を反映した結果と考えられる。</p>
---	---	---